

〈書評〉

張明輝 著

## 『先秦禮思想之研究』

小川 晴 久

本書は本学の張明輝教授の博士論文（二〇〇一年）を公けにされたものである。原文は正字による縦書きの中国文であり、九十部の限定出版である。全六百頁の大著であるが、前半の四分の一弱が、概括的分析、残りの四分の三強が五礼（吉礼、凶礼、軍礼、賓礼、嘉礼）の詳細な紹介と分析である。このような構成に見られるように本書は、三礼（『周礼』、『儀礼』、『礼記』）を中心に、儒家その他の經典の著作を補として、先秦礼思想に一つの系統をつけることを目的としたもので、意図は壮大なものである。そして本書は著者が三十余年前に二松学舎大学大に留学され、師加藤常賢先生の指導の下に古礼の研究に志されて以来の研究蓄積を集大成されたもので、畢生の作品と言えるものになっている。

『儀礼』や『周礼』を一度でもいい、聞いた者ならば、これらを畢生の研究対象にすることは思いも及ばないのではなからうか。しかし本書を繙くとそれはすぐわかる。著者の礼文化に対する高い評価と愛情がある。

「礼は中国文化の根本的特徴と特色である。」「礼は中国にあっては、一個の独特な概念である。他のいかなる民族も有していない。

他の民族の礼は、みな礼俗、礼儀、礼貌の範囲を出ていないが、中国の礼は政治、法律、宗教、思想、哲学、習俗、文学、芸術、経済、軍事に至るまで、すべてに結びついている一つの全体である。中国の物質文化と精神文化の総名である。」（七頁）

著者のこのような確信は中国人としての生来のものであるが、私は著者が緒論で紹介したモンテスキューの『法的精神』の次の一連の文章に目を瞠（おどろ）いた。少し長い引用になるが素晴らしい指摘であるのでご海容いただきたい。現在訳書が在庫切れである事情もある。

「彼ら（中国の立法者たち）は、宗教、法律、習俗、生活様式を混同した。このすべてが道徳であり、このすべてが徳であった。この四項目にかかわる控が礼（rites）と呼ばれるものであった。中国の政治が秀でていたのはこれらの礼の厳格な遵守においてであった。人はその全青春時代をこれを学んで過ごし、全生涯をこれを実践して過ごした。学者はそれを教え、為政者たちはそれを督励した。そして、礼には生活のどんな小さな行動も含まれていたから、これを厳格に遵守させる手段が見出されたとき、中国はよく統治された。」

「中国の立法者たちはその人民を静穩に生活させることを主要目的とした。彼らは、人々がたがいにも大いに尊敬し合い、各人があらゆる瞬間に、他人にいかに多くを負っているかを感知し、なんらかの点で他の公民に依存していない公民などいないということを感じするようにと望んだ。それゆえ、彼らは礼儀作法を最も広い範囲にわたって求めた。」

「この点で、礼儀作法は殷懃さよりもすぐれている。殷懃さは他人

の悪徳におもねることになるが、礼儀作法はわれわれが自分自身の悪徳を外に現すのを阻止する。それは人々が墮落するのを防ぐために自分たちの間におく障壁である。」

「中国の立法者は統治の主要目的を帝国の安寧においた。従属（服従）こそはそれを維持する最良の手段であると彼らには思われた。この観において彼らは父祖に対する尊敬を鼓吹しなければならぬと考え、そのためにあらゆる力を集中した。彼らは、生前においても死後においても父祖を尊敬するため、無数の礼や儀礼を定めた。……父祖に対する尊敬は、当然のこととして、父祖を表わすあらゆるものと結びついていた。老人、主人、為政者、皇帝がそれである。父祖に対するこの尊敬は、その子に対する愛の褒賞を前提としていた。したがって、老人の青年に対する、為政者の彼らに従属する人々に対する、皇帝の臣下に対する同じ褒賞が前提とされた。こうしたことすべてが礼を形成し、そしてこれらの礼が国民の一般精神を形成した。

最もどうでもよいように思われる事柄が中国の基本的国制に対してもちうる関係を、人は感知するようになる。この帝国は家族的統治という觀念の上に形成されている。もし諸君が父の權威を減少せしめたり、さらに、この權威に対してもつべき尊敬を表わす儀式を排除するならば、諸君は、父祖と同じとみなされる為政者に対する尊敬も弱めることになる。為政者はもはや、自分の子供とみなすべき人民に対し同じ配慮をしなくなるであろう。君公と臣民との間のあの愛の關係も、やはり次第に失われてゆくであろう。これらの慣例の一つを排除してみたまえ、諸君は国家全体

を揺がすことになる。嫁が姑に対して毎朝起きてあれこれの務めを果たしてゆくことは、それ自体としては全くどうでもよいことである。しかし、こうした外的行為こそが、すべての人々の心に刻みこまれることの必要な一つの感情、そしてすべての人々の心から発して帝国を支配する精神を形成するにいたるその感情をたえず想い起こさせているのだ、ということに気付くならば、これら一つ一つの行為がなされることが必要なのだということは、十分理解されるであろう。（中国人は、その生活が完全に礼によって導かれている）」（岩波文庫、下巻。一六九頁〜一七五頁）

私はモンテスキューの『法の精神』の冒頭部は参照したことはあったが、第三部にこのような見事な中国論（中国礼文化論）があることを知らなかった。

著者（張明輝先生）がこのような長い引用をされたのは、著者自身がモンテスキューのこの指摘に感じ入っておられる証拠であるが、私にとってもこの長い引用は必要であった。若い頃には中国の礼に反発していた私が、最近に至り、今年度は授業でもとりあげるほどに礼の勉強を始めていたので、以上の長い引用はすべてが私の心に浸み込んできた。その中でも私の心をとらえたのは礼が「温和」さを醸成するものという指摘であった。その指摘は上に引いた「人民を静穩に生活させることを主要目的とした」という段落の次にあり、張先生の引用では省かれていたが、次の通りである。

「こうして、中国の人民にあっては、村の人々もおたがいの間において上流の人士と同様に几帳面な礼儀を守っているのが認められる。これは、温和さを鼓吹し、人民の間に平和と秩序とを保ち、

冷酷な精神からくるあらゆる悪徳を除くのに極めて適切な手段であった。実際、礼儀作法から逸脱することは、自分の欠陥をいっそう気促<sup>きま</sup>に放置する手段を求めることになるのではないか。」(同上、一七〇頁)

モンテスキューは政治形態を共和制、君主制、専制の三つに分類した上で、中国人の以上のような生活様式を専制国家のそれと解した上で紹介している。私がいかに年をとったからといって専制を肯定するようになったのではない。礼が「温和さを鼓吹し、人民の間に平和と秩序を保ち」という指摘が、現在の競争社会の中で、とても貴重なものに思えたからであった。21世紀の今日にあって、見直されるべき礼とは何かを考えている私にとってモンテスキューのこの指摘が私の心をつかんだというに過ぎない。モンテスキューの『法の精神』への開眼、モンテスキューを介しての礼のこの側面(温和さの醸成)への開眼が私が本書から学んだ第一のものである。

本書を読む私の立場は、中国古代の礼思想から今日に生かせる普遍的なものを学びとるというものである。私は中国の礼を長い間研究してきた者でなく、最近に至って地球の生態系を守るために近代以前の生活様式から大事なものを学びとらねばならないという関心から礼楽制度を学び始めた者に過ぎない。張明輝先生にとっては、中国礼の専門家からの書評をこそ期待されているであろうが、全くの素人が右のような切実な関心から本書を読むという立場もあることを理解して下さると信じる。以下紙幅の許す範囲でそれ以外に学んだ四つのことを記させていただく。

第二は礼の意味として三つのことがわかってきたことである。本

書第四章第二節「儀礼の内容とその思想」、同第三節「礼記の内容とその思想」で、著者は礼の意味を①履行、②道理、③人情を体するもの(以上第二節)、④秩序、⑤宜(妥当性)、⑥別、⑦報いる、⑧始めに反<sup>かえ</sup>る(以上第三節)等々を指摘されている。これらは礼の意味としてすべて重要であろうが、最近の勉強を通じ、また本書を読んでいて①⑦⑧の三つの手がかりをつかむことができた。一つは礼とは何よりも履行(実行)することである。(①)。言と行、知と行の関係で言えば行が礼であることである。沢山のことを学び、考え、口にする。しかし礼は実行することである。実行することは限られる。礼は前者が「多」「増」であるのに比して「少」「減」の性格を帯びる。二つめに礼とは報いることである(⑦)。人から物や手紙をもらったら、同じことを返すことである。自分の持ち物(時間、労力も含めて)を減らすことである。本書では北米インディアンのポトラッチやメラネシアのクラが礼品交換の例にあげられている(一七頁)。三つめに礼は始めにかえることである(⑧)。

以上の三つの手がかりのうち、もっとも身近に感ずるのは二つめである。人から物をもらうばかりで人に物を返すことのできぬ自分をますます見るにつけ、この意味の礼はよくわかる(自分が実践できていないという自覚で)。始めにかえるという要素は最近漠然と感じ始めたというのが正直なところである。死が近づいてきたという自覚を通して。三つの手がかりに共通する要素は、礼とは減らすということである。『礼記』楽記篇に「礼主其減、樂主其盈」という規定があることも、本書を契機に知った。

本書から学んだ第三のことは復礼である。復礼とは凶礼に属する

喪礼の招魂礼のことである。『儀礼』士喪礼の冒頭に復者一人を立て中屋に北面し、死者の衣をかざして死者の名を長く三度呼び、死者を再生させようとする儀式（礼）があることを私は本書で初めて知った。「<sup>つ</sup>畢ぐ。某<sup>それがしかえ</sup>復れ」と。仏式の喪式しか知らない私には儒式に復礼という哀切な儀式があることを知らなかった。この復礼は現代に甦らせていいものの一つである。その意味で『儀礼』士喪礼の冒頭部分は光り輝いている。

学んだことの第四は死者飲含礼としてすでに殷代に玉蟬が用いられ、西周時代には玉蚕が用いられたことである。蟬や蚕<sup>かいこ</sup>は見事な羽化をとげる。古代人は死者がそのように甦ることを願って玉で蟬や蚕を作り、それを死者の口に含ませた。

『史記』屈原賈生列伝に古代人の蟬の觀念が示されているという。

「蟬は濁穢より蛻<sup>もぬ</sup>け、以て塵埃の外を浮游す。世の滋垢を獲ず。蟬然として泥するも滓<sup>くず</sup>まず。」（三二六頁）

このような風習や儀式は現代に甦せてよい。

学んだことの第五は冠礼（成人式）が古代にあってとても重んぜられたことである。

「冠は、礼の始めなり。この故に古への聖王は冠を重んず。」（『礼記』冠義）

先住民族で成人になるための通過儀礼がことのほか厳しいものであること（あったこと）を聞いたことがある。それと比べると現代日本の成人式はただ二十歳<sup>はたち</sup>を迎えたに過ぎないような軽さを覚える。現代よりは過去に遡れば遡るほど、成人の条件は厳しかったであろう。狩猟民であれば、実際乏しい食糧で山野で何日も生きぬく

儀式が課せられたであろう。

古代の射礼を見ても成人男子の弓の実力があらゆる機会に試される実力本位の世界であった（五五六頁）。

冠礼で注目される一つは字<sup>あざな</sup>をもらうことである。

「冠して之に字す。その名を敬すればなり。」（『儀礼』士冠礼、五二二頁）

成人になると父母や君主の前以外は名は使わず、字でお互いを呼ぶようになる。字をもらうことで未成人と成人の差が歴然となる。

このような風習（礼）も現代に甦せていいものの一つではなからうか。古代の字<sup>あざな</sup>のつけ方は、首字は排行を表示し、末字は男は甫または父、女は母または女であったという（王国維『觀堂集林』卷三「女字説」、五二四頁）。

以上のこと以外にも本書から学んだことはまだまだある。古礼のうち天地や山川など自然を祀ることの意味は、自然への畏敬とその恵みへの感謝であったであろう。それは地球の生態系が破壊され始め、自然が汚染されている今日にあっては、その復活は生態系そのものの直視につながるであろう。また自分の死を正しい形で迎える「慎終と正終」の礼も忙しく、働き過ぎの現代人には至難の技であるが、それだけに新鮮である。郷飲酒礼や宴礼などを見ると、現代でも会食する機会が多いが礼が棄てられていることに気づく。卒業生（修了生）を送る会や新人生を迎える会、非常勤の先生に感謝する会など年中行事として行われているが、主人公の影が薄くなっている。趣旨が忘れられ、ただ飲み食いだけに終わっているとしたら、礼が棄てられている姿であることに近づかされる。

以上が私が本書を一読して学び考えた数々のことである。しかしこれのみ記し、著者が現代に対するどんな危機意識に立って古礼の研究にとりくまれたかに言及しないとすれば大変一人よがりで、礼を失する「書評」となる。

著者は結論の章で古礼研究の目的を次のように簡潔に指摘されている。

「古礼研究の目的は、歴史の齒車を逆回転させるところにあるのではなく、古礼の教化精神を探求し、礼数の差異を描写することにある。階層の対立性を強めることにあるのではなく、階層の区分が社会秩序を安定させる作用を持っていることを理解することにある。秩序は和諧に到達する前提である。和諧は社会安定の先声（前触れ）である。安定は生命発展の保障である。」

次に人間はその誕生の始めから集団的本能に動かされる社会的生物であることを指摘し、中国古礼に強くそれが反映したことを、以下のように定式化した。

『礼記』における体制は、極めて集団組織を重視した社会機構である。これにより、生命礼儀の設計は、単一の個人のための設計に止まるものではなく、集団を整える作用を具有している。儀式のはたらきにより均一した安寧と普遍的な知識に到達することを目的とする。それ故、礼儀の中から「死んでも絶たれない生命観」を総体として存在する和諧観、「死で生に教える価値観」を定式化して抽出した。」

その上で現代社会は、人類が長い歴史をへて鬼神や自然の盲目的支配から脱却し、科学技術を發揮して物質的資源の活用をはかり、

自我意識を高度に伸張させた結果として、「有我無神、有我無物、有我無人」の自我独立の社会となり、人と家庭の血脈連係性や人と社会の相互依存性をも無視する危機的状況であることを指摘する。情欲や財利のために自己の生命を犠牲にする、すなわち個人の生命を自己の私有財産視している風潮をめぐり出し、先に抽出した古礼の三大観念を現代に生かす必要性を強調される。第一の生命観は臓器移植に、第二の和諧観は自然との共生に、第三の価値観は道徳的行為を実戦を強化することに。

以上終章（結論）で示された古礼の「礼儀」機構の定式化とそれが示す三大観念の抽出、現代への適用は見事であり、著者の古礼研究の実践的性格をよく示している。現代への適用のうち三つめの「道徳的行為の実践の強化」のところは著者の専論を期待したい。

ここまで書いてきてどうしても言及したいことが生じた。十年ほど前に出会ったフランスの思想家シモーヌ・ヴェーユ（一九〇九—一九四三）の指摘——魂（精神、心）の要求する14の糧<sup>かて</sup>である。秩序、自由、服従、責任、平等、階級性、名誉、刑罰、言論の自由、安全、危険、私有財産、共有財産、真実（『根をもつこと』）。肉体が食物という糧を求めるように、魂も生き続けるには糧が必要であるという。その筆頭に秩序があげられていることは、礼（＝秩序）がいつの時代にも必要とされてきたことや、礼が現代にあっていかなる意味を持つかを考える上で意味深い。シモーヌ・ヴェーユの14の魂の糧の連関を考える作業は、人間平等の上に21世紀の礼秩序を考える、意味のある作業となるような気がしてきたことを付言する。

〔本学文学部教授〕